

「セーフティエンジニアリング (SE)」 200号までを振り返って

公益財団法人総合安全工学研究所 専務理事

小川 輝繁 Terushige Ogawa

公益財団法人総合安全工学研究所機関紙「セーフティエンジニアリング」(以下、SE 誌) 200号発行に際して、その歴史を筆者が知る範囲で紹介する。

総合安全工学研究所(以下、総安研)は、1973年8月3日に旧科学技術庁所管の財団法人として設立された。当時は、高度経済成長により産業事故や公害・環境汚染が社会的にクローズアップされ、産業界も安全工学の必要性を認識し始めていたこともあり、経済同友会代表幹事で東京電力株式会社社会長であった木川田一隆氏他同友会のメンバーなどの産業界と安全工学に関心のある大学教員の支援を受けて、総安研は活動を始めた。初代理事長には、当時の科学技術会議議員であった黒川真武氏が就任された。

総安研の事業の一つに、「総合安全工学に関する科学知識の普及・啓発」があり、この事業を実施するために、専務理事・事務局長として総安研の運営に携わっていた横浜国立大学安全工学科教授福山郁生氏が中心となり、SE 誌の発行が企画された。筆者は、この企画には参加していなかったが、当時横浜国立大学助手として、福山教授の下で仕事をしており、SE 誌の企画のことは多少福山教授から聞いていたので、その範囲で紹介する。安全工学に関する科学技術を担う学術団体として、安全工学協会(現安全工学会)があった。安全工学協会では機関紙「安全工学」を発行していた。「安全工学」には、主に産業安全に係る学術論文、総説・解説および資料

などが掲載され、大学や研究機関の研究者ならびに企業の技術者を対象とした記事が掲載されている。そこで、SE 誌は現場の従業員が気軽に読めて、安全に係る科学技術を理解してもらうことを目指した。そのため、文字は通常の学術雑誌より大きくし、文字数を減らしてイラストや写真をできるだけ多くすることとした。また、カラー印刷とし、印刷する紙も上質のものとした。また、内容は安全に係る問題について幅広く取り上げ、素人にも分かりやすいものにするのを心掛け、執筆者にもお願いしている。

SE 誌は、前述の福山郁生氏が編集発行人となり、1974年4月1日に創刊された。創刊号の表紙と記事の一部をそれぞれ図1および図2に示す。イラストや写真を中心にしたカラー印刷の科学技術雑誌は当時としては画期的なアイデアであり、その後イラストや写真を中心とした科学雑誌「ニュートン」(1981年創刊)などが発行され、話題となった。SE 誌の創刊当時の編集は福山郁生氏の他、横浜国立大学上原陽一氏、産業安全研究所近藤太二氏および昭和大学山口裕氏の4名による編集グループによって行われた。第1巻第3号までは編集グループが記事を執筆していたが、第4号からは編集グループ以外から提供された原稿をもとに編集グループで記事を作成し、原稿提供者は「原案作成者」として巻末に紹介されている。1982年9月1日発行の第9巻第2号(通巻36号)からは各記事の最後に執筆者の所属と名前を記載するようになっ

たが、1988年9月1日発行の第15巻第2号（通巻60号）から名前の下に原案提供者と記載されるようになったので、基本的な姿勢は、原稿を頂いた方はあくまでも原案提供者であって、記事は編集委員会が制作することになっていた。2004年10月1日発行の第31巻第3号（通巻131号）から現在のように、執筆者の所属と名前を最初のタイトルの下に記載するようになり、現在では、執筆原稿をできるだけ尊重して、編集委員会が手を加える場合は執筆者の同意を得るようにしている。

編集グループは1983年9月1日の発行の第10巻第2号（通巻40号）から編集委員会と名称を変更して、福山郁生氏が編集委員長に就任し、2007年3月1日発行の第34巻第1号（通巻143号）発行後退任された。同氏は創刊から約34年間に亘って、編集発行責任者を務めた。第34巻第2号から現編集委員長の福富洋志氏が編集委員長に就任して編集発行人と

なって現在に至っている。

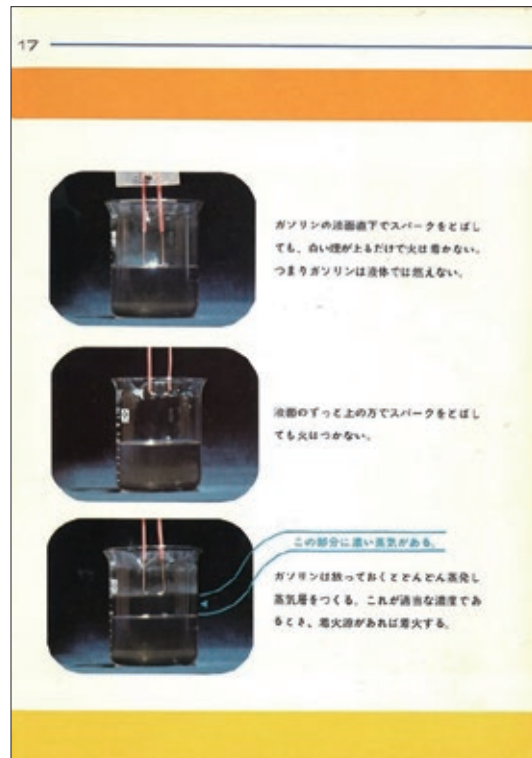
SE 誌の表紙には、創刊号から2008年3月1日発行の第35巻第1号（通巻148号）まで写真を使用した。腕に自信のある関係者に写真を提供していただき、できるだけ写真の解説を頂戴して裏表紙に掲載した。第35巻第2号からはイラストを表紙に使っている。イラストはイラストレーターの今野昇平氏に描いていただいている。イラストはできるだけ記事の内容と関係のあるテーマで、安全に係る教訓めいたものとし、「表紙のおはなし」として、その教訓を裏表紙に掲載している。「表紙のおはなし」は編集副委員長の星野崇氏が担当していたが、現在は今野昇平氏にお願いしている。

できるだけ多くの現場の従業員の皆様にSE 誌を読んでいただき、産業安全に寄与することを期待する。

図1 創刊号 表紙



図2 創刊号 記事



「引火とは」目で見える引火の実際